

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：33901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381048

研究課題名(和文) 帰国後のお雇い教師H.ダイアー研究 - 教育文化還元活動と日本支援活動を中心に -

研究課題名(英文) Educational Advisor Henry Dyer in Scotland: Applying Lessons from Japan to Scottish Engineering Education and Supporting Japanese Interests

研究代表者

加藤 証治 (KATOH, Shoji)

愛知大学・法学部・教授

研究者番号：00109232

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：ダイアーは帰国後、日本での体験にもとづいて、日英交流の推進、日本研究、グラスゴウ技術教育改革を推し進めた。具体的には、グラスゴウ大学日本語資格試験の導入、工部大学校お雇い造船学教師P. A. ヒルハウスの推薦、日本政府の帝国財務及工業通信員として日本財政経済の紹介にあたった。母国英国と比較して日本研究を深め、日本から学んだ教訓を英国社会改革に役立てようとした。とくに日本の成長における教育の役割を重要視した。グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの創設(1886年)のさい、工部大学校における実践(教育課程、実験室教育、サンドイッチ方式など)を移し入れたようとした。

研究成果の概要(英文)：After returning to Britain, Dyer relied on his experiences in Japan to: 1) promote exchange between Britain and Japan, 2) do research on Japan, and 3) advance reforms of engineering education in Glasgow.

To be concrete, 1) he helped Glasgow University adopt a Japanese Language Examination in 1901. He recommended P. A. Hillhouse for a foreign advisor to teach shipbuilding at the Imperial College of Engineering. He was commissioned as Imperial Financial and Industrial Liaison whose chief duties were to publish articles on financial and economic matters on Japan. 2) He published many works that, through comparisons between Britain and Japan, portrayed Japan as a model country and suggested applying lessons learned from Japan to stagnated reforms in Britain. Also, he placed the emphasis on the role that education played in Japan's growth. 3) When the Glasgow College was founded in 1886, he transplanted the course of study and class curricula from the Imperial College of Engineering.

研究分野：社会科学

 キーワード：お雇い教師 ヘンリー・ダイアー スコットランド グラスゴウ大学 工学教育 スコットランド工学
 殿堂 P. A. ヒルハウス 明治日本

1. 研究開始当初の背景

(1) 近代日本成立期における西洋情報摂取の経路(お雇い教師の招聘, 留学生の派遣, 使節団・調査団の派遣, 万国博覧会への参同, 学術文献の輸入・翻訳)に関する研究, ならびに(2) お雇いスコットランド人教師H. ダイアーの招聘とグラスゴウ日本人留学生を介した, 日本・スコットランド間の「教育連鎖」をめぐる研究を進めるなか, 英国のなかのスコットランド, とりわけグラスゴウと近代日本との緊密な関係, および近代日本の成立と発展におけるグラスゴウの大きな貢献に, 着目した。

しかも, (3) グラスゴウは, お雇い教師による日本教育・日本文化, 日本見聞の「持ち帰り」による, 日本からの「逆影響」という注目すべき局面も認められること, とくにダイアーは帰国後もグラスゴウ技術教育改革や日本紹介・日本支援活動に尽力していることに着目し, 本研究課題を構想するに至った。

2. 研究の目的

(1) お雇いスコットランド人教師H. ダイアーが帰国後に, スコットランドのグラスゴウを拠点にして行った諸活動のうち, 日本滞在中の教育実践, 日本見聞, 日本事物の収集, 人的交流をもとにした諸種の「教育還元」活動, ならびに 日本紹介・日本支援の諸活動を考察対象とし, その具体相を解明する。

(2) 具体的には, 帰国したH. ダイアーによる, 日本教育の振興・支援活動, とくにお雇い教師の推薦と紹介, グラスゴウの技術教育改革, とくに工部大学校における教育実践にもとづいたグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの再編, 日本研究ならびに日本事物の紹介宣伝, とくに美術工芸品の持ち帰りや寄贈・紹介, という「日本教育支援活動」ならびに「教育文化還元活動」である。

3. 研究の方法

(1) H. ダイアーによる 東京帝国大学お雇い造船学教師P. A. ヒルハウスの推薦, 工部大学校における教育実践にもとづいたグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの教育課程・学科編成の整備, 日本美術工芸品の持ち帰りやエディンバラ市中央図書館への寄贈をめぐる記録史料を素材として, (2) それぞれの具体的様相を解明し, (3) 日本から英国への教育文化還元活動を, 具体的に明らかにした。

4. 研究成果

(1) お雇いスコットランド人教師H. ダイアーは, 任務を終了し帰国してから, 日本での体験と見聞にもとづいた日英交流の推進, 日

本研究, グラスゴウにおける技術教育改革を推し進めた。

(2) 日英交流の推進活動としては, 第1に, 1901(明治34)年グラスゴウ大学に日本語資格試験が導入されるのを支援した。第2に工部大学校で造船学, とくに船体設計・船体製図という専門学を教えるお雇い教師の選任が難航したとき, P. A. ヒルハウスを推薦した。第3に日本の図書・冊子, 美術工芸品, 楽器類, 写真・絵葉書などを収集し, これをグラスゴウおよびエディンバラの図書館や美術館に寄贈した。ダイアーの死後, 寄贈品はしばしば展覧会に出品されたことで, 日本紹介, 日本との親善に寄与した。第4に日本政府の帝国財務及工業通信員を委嘱され, 日本の, とくに「財政経済二関スル事項ヲ新聞雑誌ニ掲載」することを主務としたスポークスマンになっている。

(3) 日本研究では, 自著『大日本』(1904)『世界政治のなかの日本』(1909)等にみられるように, 第1に母国英国との比較研究にもとづき日本をモデル国と位置づけ, 日本から学んだ教訓を沈滞している英国の改革に役立てようとした。

第2に, 日本の成長における教育の役割をとくに重要視した。自生的に工業化が進んだ母国英国との比較をとおして, 「日本の国家的教育制度」を高く評価した。日本の急速な成長は「それまでに日本で確立されてきたきわめて完璧な教育制度」の基盤の上で展開されたとみなし, 日本の経験は「英国への教訓となる」と説いた。

第3に, 多数の日本関係資料を活用した。日本の友人たち, とりわけ工部大学校関係者からの協力に加えて, 帝国財務及工業通信員に任せられたことで日本政府を介して多くの日本情報を自在に活用することができるようになり, つねに日英両国の動向を観察しつつ分析を深めた。

(4) グラスゴウの技術教育改革は, 講演および論説を通じた言論活動, ならびに既存の技術系カレッジの統合・再編への参画を通して進められた。

まず言論活動では, グラスゴウ哲学協会, スコットランド技術者協会, 『グラスゴウ・ヘラルド』紙, 『ネイチャー』誌などにおいて, グラスゴウ技術教育の課題を指摘し, 具体的な改革策を提示した。そのさい, 工部大学校における実践の成果とヨーロッパ大陸の実状について視察し研究した成果とを参考にした。

実践活動では, グラスゴウに存在する五つの教育機関が統合されグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジが1886年に創設されたさい, アンダソン・カレッジ選出理事の一人としてこれに参画した。教務人事委員会のカレンダー小委員会の委員長, 図書館・博

物館委員会の委員長などを務め、工部大学の学科課程や授業科目の移植、工学実験室の整備など実験室教育の重視、学理と実地を統合するサンドイッチ方式の導入、昼間課程の学生むけに資格証明書(ディプロマ)を授与する制度の新設などを提案し実現した。いずれも「日本での教育体験の成果を導入した」ものであった。

(5) ダイアーは明治6(1873)年に工学教育の近代化のために英国のスコットランドから招かれたのだが、明治16(1883)年に郷里グラスゴウに戻った後は、日本での体験と見聞にもとづいて改革を提言するとともに、日本をモデルにした改革を実際に先導した。

(6) 一般にお雇い教師は、古代の渡来人とは違い、任務が終了するか契約が満了ないし中断されれば、日本を離れて母国に戻る。そのさい日本での体験や見聞だけでなく、日本滞在中に築いた人脈、日本で集めた事物も一緒に持ち帰る。母国に戻ってから日本と関係を保ち続け、持ち帰った体験・見聞・人脈・事物などを介して、母国と日本の交流が推進される場合がある。

このような帰国後の諸相を分析することは、お雇い教師の人物像を一段と精緻化するとともに、帰国したお雇い教師を介した両国の関係と交流の歴史像を再構成することになるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

加藤詔土「The Early Career of Henry Dyer, a Self-Made Scottish Educational Advisor in Meiji Japan」, 愛知大学教職課程『愛知大学教職課程研究年報』第6号(2017)53-74頁, 査読無。

加藤詔土「お雇いスコットランド人教師H.ダイアーと近代日本工学教育」, 愛知大学教職課程『愛知大学教職課程研究年報』第6号(2017)1-34頁, 査読無。

加藤詔土「世界に拓かれた近代日本教育 - 英学史研究の一視点 - 」, 日本英学史学会東日本支部『東日本英学史研究』第16号(2017)8-19頁, 査読無。

加藤詔土「英国におけるヘンリー・ダイアー研究」, 関西教育学会『関西教育学会年報』第40号(2016)6-10頁, 査読無。

加藤詔土「「スコットランド工学殿堂」入り - お雇い教師ヘンリー・ダイアー - 」, 日本英学史学会『日本英学史学会会報』第139号(2016)3-4頁, 査読無。

加藤詔土「Meiji-era Educational Advisor Henry Dyer's Studies of Japan: His Work and its Special Characteristics」, 愛知大学教職課程

『愛知大学教職課程研究年報』第5号(2016)33-56頁, 査読無。

加藤詔土「グラスゴウ大学創立450周年記念式典(1901) - 明治日本とグラスゴウ大学の交流 - 」, 日本英学史学会『英学史研究』第48号(2015)17-40頁, 査読無。

加藤詔土「お雇い造船学教師P. A. ヒルハウス - 帰国後のH.ダイアーによる推薦 - 」, 日本英学史学会関西支部『関西英学史研究』第8号(2014)53-69頁, 査読無。

加藤詔土「「帰国後のお雇い教師」をめぐる考察」, 関西教育学会『関西教育学会年報』第38号(2014)46-50頁, 査読無。

[学会発表](計5件)

加藤詔土「帰国後のお雇い教師ヘンリー・ダイアー - 日本教育の還元 - 」関西教育学会第68回大会, 2016年12月3日, 立命館大学衣笠校舎(京都府・京都市)

加藤詔土「お雇いスコットランド人教師H.ダイアーと近代日本の工学教育」日本英学史学会関西支部第25回研究大会, 2016年8月27日, 同志社大学アモスト館ゲストハウス(大阪府・大阪市)

加藤詔土「英国におけるヘンリー・ダイアー研究」関西教育学会第67回大会, 2015年11月15日, 佛教大学(京都府・京都市)

加藤詔土「グラスゴウ大学創立450周年記念式典(1901) - 明治日本とグラスゴウ大学の交流 - 」日本英学史学会関西支部第51回支部大会, 2015年6月6日, 桃山学院カンタベリー記念館(大阪府・大阪市)

加藤詔土「お雇い教師P. A. ヒルハウスの推薦 - 帰国後のH.ダイアーの活動 - 」日本英学史学会関西支部第50回支部大会, 2014年6月4日, 兵庫県立大学姫路環境人間キャンパス(兵庫県姫路市)

[図書](計1件)

加藤詔土「ヘンリー・ダイアー - 日本工学教育の組織化に貢献 - 」, 木村正俊編『スコットランドを知るための65章』明石書店, 2015(2015)355-359頁。

[その他](計1件)

加藤詔土『帰国後のお雇い教師H.ダイアー研究 - 教育文化還元活動と日本支援活動を中心に - 』科学研究費補助金研究成果報告書, 2017, 全174頁。

[産業財産権]

[出願状況](計0件)

[取得状況](計0件)

[その他] 該当なし

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 鉦治 (詔士) (KATOH, Shoji)

愛知大学・法学部・教授

研究者番号 : 0 0 1 0 9 2 3 2

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし

(4) 研究協力者

該当なし